

白 いドレスシャツは、クラシックにして無難な、男の万能型定番服である。レフ板効果を發揮して男の顔を明るく引き立てながら、着こなし次第であらゆる場面に対応できる。

無難でありながら、ここ一番の見せ場において出番が多い。洋服世界の男たちは、肖像を残そうとするときには、白いシャツを着た。16世紀、17世紀のヨーロッパの貴族は、上着にストラッシュ(裂け目)を入れ、下に着ている白いシャツをのぞかせた。なぜなら、白イリネンのシャツは財産目の一つと数えられるほどの富の象徴だったから。18世紀には襟元や袖口から白いレースをちら見させ、その名残としての白いカラーとカフスは、19世紀に完成したスーツにおいて、男のエレガンスの象徴となった。21世紀の今、白いシャツにも多彩なバリエーションがある。それゆえ、選び方に応じて、まったく違う印象が生まれてしまう。コットンの品質、糸の細さ、ボタンの質やつけ方、ステッチの入り方、なによりも身体ラインを生かすフィット感。ごまかしがきかない白いシャツであればこそいっそう、仕立ての細部の差が、着る人の品格を左右する。

しない美意識がある。これをイタリア語でスプレッツアトゥーラという。さりげなき、と訳されるが、源流にあるのは、ルネサンス期イタリアの宮廷人が重んじた美德である。より厳密に言えば、さりげなく見せるための高度な技のこと。水面下では努力を惜しまず、表面上はあくまでさりげなくふるまうことが男の装いの肝である。

この美意識が、19世紀のダンディズムに受け継がれる。「人が振り返って見るようでは失敗。あくまでもさりげなく見えることを着こなしの信条とせよ」というのがダンディの祖、ポー・フランメル の教えである。彼はシャツやネクタクロス(装飾用首巻)をわざわざ水のきれいな田園で洗濯させていたが、白さの維持こそが、目立たないけれど実は最も難しいおしやれであることを理解していたからであろう。現代でもこの教えはクールという美意識の中に生きる。

選び抜いた服を着たとしても、服の印象をその人自身の印象以上に強く残さないこと、そのためには着る人自身が自分自身をクールな目で客観視できるセルフコントロールが必要になる。自分にふさわしい一枚を選び抜き、それをさりげなく着こなすセルフコントロールができたとき、白いシャツは、男の服として無敵のパフォーマンスを發揮する。



文中野香織

なかの かおり / 東京大学大学院修了。ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、2008年より明治大学国際日本学部特任教授。専門はファッション文化史やダンディズム、イギリス文化史。著書に『モードとエロスと資本』(集英社新書)『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』(新潮選書)など。

P.4 ドレスシャツ 右より時計回りに ¥41,000 (ターンブル&アッサー/ヴァルカナイズ・ロンドン Tel.03-5464-5255) ¥25,000 (エリコ フォルミコラ) ネクタイ ¥16,000 (ニッキー/2点共ユナイテッドアローズ 原宿本店 メンズ館 Tel.03-3479-8180) ¥58,000 (キートン/キートン 六本木ヒルズ店 Tel.03-5786-7760) ¥33,000 (ルイジ ボレリ/ビームス ハウス 丸の内 Tel.03-5220-8686) ¥24,000 (カタリザノ/テイラー&クロース Tel.03-3583-6025)
P.5 ドレスシャツ ¥48,000 (シャルベ/伊勢丹新宿店 Tel.03-3352-1111)